

コモンズの過少利用問題

高知大学教育研究部総合科学系 教授 飯國 芳明

コモンズという言葉は今世紀になって盛んに使われるようになった。ブームといってもよいかもしれない。秋道智彌氏や井上真氏らの編著書が相次いで出版され、本年6月には富士吉田市で国際コモンズ学会が開催されるに至っている。世界的にみても、エリノア・オストロムが2009年にコモンズの業績でノーベル経済学賞を受賞するなど、その注目度は高い。

しかしながら、コモンズが何かについては必ずしも統一的な理解があるわけではなさそうである。コモンズは論者がそれぞれに定義するといっても過言ではない状況にある。議論百出の中で、オストロムは早くからコモンズに厳密な定義を与えてきた。すなわち、「潜在的な受益者を、利用から排除するには多大の費用を要する自然あるいは人工的な資源系」とする。多数の利用者が自分勝手に資源を利用して、やがては枯渇してしまうタイプの資源系をコモンズと呼んだのである。この種の資源系は過剰利用の危険性があるから、受益者集団が利用を抑制するルールを確立してきた。その利用形態こそがコモンズを持続的なものにしてきたというのがオストロムの主張であった。

日本の入会地は、オストロムが著書 *Governing the Commons* で取り上げる典型的なコモンズの一つである。中山間地域をフィールドとする筆者は、しばしば入会地の現場を訪れる機会を得てきた。しかし、そこで目にするのは、オストロムが言う過剰利用問題ではなく、むしろ過少利用問題であった。

過少利用問題は阿蘇草原で典型例をみることができる。阿蘇草原では、毎年3月に輪地切と呼ばれる防火帯をつくり、火入れを繰り返してきた。火入れがなければブッシュ化が進み、草原の生態系はやがて森林へ遷移する。草原が失われれば、その景観や生物の多様性などの貴重な資源が失われる。そこで、阿蘇草原では利用規制ではなくて、利用の促進や草原の管理体制の再編が急務となっている。こうした現象は里山や水利施設といったコモンズでも同様にみられる。里山は人の手が入った二次的な自然であり、その維持には定期的な伐採が欠かせない。また、水利施設は利用者が低下する中で劣化が著し

いため、保守管理は焦眉の課題となっている。

では、現代日本のコモンズで過少利用が問題とされるのはなぜであろうか。オストロムが言うようにコモンズが過剰利用を克服する仕組みであるとすれば、利用が過少になれば問題は解決するはずである。にもかかわらず、過少利用が問題となっている。

筆者はこの原因をコモンズの形成過程の違いに求めることができると考えている。草原や水利施設をみるかぎり、これらの資源系には規模の経済性がある。すなわち、資源系を作り出したり維持したりするには、多くの人の手を入れることが不可欠である。また、共同で行うことで効率を大幅に高めることができる性質がある。多くの住民が作り出した資源系であれば、地域の多数の住民が同時に利用する資源（コモンズ）ともなる。したがって、これらの資源系は、オストロムが想定する利用者の排除を目的とするコモンズとはその成り立ちが少なからず異なっており、だからこそ、利用が低下したときに新しい問題が立ち現れたのである。

こうして考えると、コモンズはオストロムがいう過剰利用を防ぐタイプのコモンズと人為によるストック形成を基礎とするコモンズの二つに切り分けるのがよさそうである。前者のコモンズには過剰な利用を防ぐための監視が必要であり、そのためには多くの人の目が必要とされる。これに対して、後者の場合には人為的なストックの維持が重要であり、多くの人の手が必要とされる。草原などでは利用が低下した後は産業としてそれを利用する主体だけでは維持ができない。そこで、地域住民やボランティアなどによる人手が求められることになる。

以上、コモンズの過少利用問題を素描してきたが、この問題は新しい。今後は、経済学だけでなく法学的な視点を踏まえたさらなるアプローチが望まれる。

